

アジア太平洋平和研究学会（APPRA: Asia-Pacific Peace Research Association）2017 年大会参加報告

APPRA の 2017 年大会はマレーシアのパナンで開催された。以下はそれに参加した当学会会員 4 名の報告である。



Taipingにて APPRA 参加者。提供・山根和代氏。

■ マレーシアでの APPRA 大会について

立命館大学国際地域研究所客員研究員 山根和代

アジア太平洋平和研究学会（APPRA: Asia-Pacific Peace Research Association）が、8月23-25日にマレーシアのPenangにあるUniversiti Sains Malaysiaで開催されました。テーマは、“Promoting Peace and Upholding the Transcendent Dignity of the Human Person in the Asia-Pacific Region”で、15カ国から67名参加しました。同時にいくつか分科会が開かれましたが、参加したパネルや印象に残ったことなどについて報告します。

私は「平和博物館を通した平和教育」というパネルを組織し、パネリストは韓国のDr. Koo-do Chung (The No Gun Ri International Peace Foundation)、中国のYuchao Wang (John Rabe Memorial at Nanjing University ボランティア学生で、現在アメリカの大学に留学中)、マレーシアのProfessor Ahmad Murad Merican (Universiti Sains Malaysia: 植民地主義に関する博物館)、アメリカのProfessor Roy Tamashiro (Webster University: 韓国の済

州4・3事件の教訓)、そして日本では山根和代(立命館大学: 日本の草の根の平和資料館の活動)でした。各館における平和教育について、交流をすることができました。マレーシアの参加者は今後平和博物館・植民地主義博物館を作ることに関心を持っていて、心強く思いました。

マレーシアで最も印象に残ったことは、異なった文化や宗教であるにもかかわらず、比較的仲良く暮らしていることでした。学校教育も、マレー人、中華系、インド系の異なった宗教や文化の子ども達がいっしょに学んでいるそうです。4月に北アイルランドのベルファストで国際平和博物館会議が開催されましたが、その時にカトリックとプロテスタントの居住地が「平和の壁」で仕切られ、従って子どもが通う学校も別であること、しかしいっしょに学校へ行く場合もあるが少ないと聞いていました。同じキリスト教なのにどうしてそれほど対立があるのかと思ったので、マレーシアでモスクにキリスト教の司教が行っていたのに、感動しました。

しかし日本の植民地主義や第二次世界大戦中日本の侵略で多くの人々が殺され苦しんだことについて、日本人とし

では心苦しい面がありました。参加者は戦争博物館を訪問する時間はありませんでしたが、第二次世界大戦中日本軍に殺された兵士の墓地（Taipingにある）に行くことができました。参加者はその後平和公園を訪問し、植樹に参加することができました。歓迎会では、今後平和博物館を創る上で参考にしたいとのことで、四人の参加者が平和のための博物館について話す機会がありました。（第五福竜丸展示館について明治学院大学の高原孝雄教授、川崎平和館の暉峻僚三氏、アメリカのロイ・タマシロ教授、国際平和ミュージアムの山根和代）今後マレーシアで平和博物館を創りたいということを知り、嬉しく思いました。

モスクを訪問する機会があり、そこでは食事を提供して下さいました。その代表である方が「私の父は日本軍の空襲によってここで殺されました」と言われ、胸が痛みました。その後彼に私は一日本人として、「日本が謝罪も賠償も個人レベルで行っていないで申し訳なく思います」と述べると、「過去にばかり目を向けるのではなく、前を向いて生きていきましょう」と言われました。日本人を憎んでも不思議ではありませんが、彼の寛大さに深い感銘を受けました。

次の国際平和研究学会大会は2018年12月にインドで開催され、またアジア太平洋平和研究学会大会は2019年インドネシアで開催されるであろうと報告されました。APPRA大会では、様々な平和研究者との交流や平和研究者のアジア・太平洋ネットワークを作ることができ、平和研究と平和教育の推進にとって良い機会でした。この大会報告に基づいて、今後本の出版が計画されています。

■ APPRA 参加報告

暉峻僚三

8月23日～25日の日程で、マレーシア・ペナン島で開催されたAPPRAに参加・発表を行ってきた。会議本体はキーノートと全体会、パラレルで構成されており、私は2日目のパラレル「教育」で発表を行った。

期間中は様々なセッションが同時並行で開催されていたため、全てをカバーできたわけではないが、最も印象に残ったのは初日の全体会議の中で提起された「平和研究の課題とされているものは、数十年間あまり変わっていない。変わっていないということは、平和研究自体が、課題の解決にあまり寄与していないということではないか」という問いかけだった。この問いかけは、APPRAだけではなく、日本平和学会も大いに考えるべきものだろう。現在は、アカデミックな檻に自らを閉じ込め「社会（ノンアカデミック）に対して正しい答えを教える」という空虚なアプローチではなく、「社会の中で、社会のメンバーとしてどう平



APPRAの会場。撮影・暉峻僚三氏。

和をつくってゆけるか」を意識した実践に大きなエネルギーを注ぐべき時期にさしかかっているように、個人的には感じている。

自分の発表としては、2日目の「教育」パラレルで機会をいただいた。パラレルでは、日本社会はどのようにレイシズムを乗り越えてゆけるのかを切り口に、公的機関と公教育の果たすべき役割や、とるべきポジショニングについて話した。発表では、まず日本社会のレイシズムの現状を事例としてヘイトデモの動画なども見せながら説明し、日本でレイシズムのターゲットとなる属性は、過去の植民地支配と深い関わりがあることが多いことを説明した。開催場所が北東アジアではなく、マレーシアという南に位置する国であったこともあり、日本人の参加者以外には、日本のレイシズムの現状や、レベルについてはほぼ認識されておらず、参加者は一様にショックを受けていたように感じた。

続いて、このような自慰的自民族中心主義的傾向や排外主義的傾向に抗する取り組みなど、日本社会のネガティブな側面を直視しようとする必ず出される、もはやマジックワードといってよい「政治的中立性」に対して、公的機関のとるべきポジションについて話をした。特に公教育の現場と、平和博物館を中心とした公的施設におけるポジションは、公的施設の役割が法体系の中で規定されているものである以上、政治家やクレームといった「人」のパワーによって左右されるべきものではないはずだが、現実にはそうならないことを述べた。

これらだけで済ませてしまうと、マレーシアまで愚痴りに行ったようなものなので、最後に自慰的自民族中心主義的傾向や排外主義的傾向に抗するために教育や平和博物館のできる取り組みとして、1) 社会のメンバーシップとしてのナショナリズムの再構築、2) レイシズムに抗する、より明確な反応、3) 多様な痛みの集合的記憶を見据えた教育と、例としてのフィクションの使い方などを提案し、発表を終えた。

■ APPRA のエキスポとスパイス！— 2017 in Penang をふりかえって—

日越大学 桂良太郎

○「国際会議とは実に刺激的な、まるで人生のエキスポとスパイスのようなものである」

2017年8月25日、ペナンで開催されたAPPROの開催中に、山根和代さん、池尾さん、ロイ玉城さん、シドニーからお越しのクラレモントさん、韓国ノグンリ平和財団のチョン博士とヘヨンさんの7人で、うまく出会い、ペナンでしか見られない典型的なプラナカンスタイルのお屋敷で昼食をとることになりました。プラナカンとは、15世紀ごろから中国からこの地に渡ってきた人々と現地の女性との間に生まれた人々の子孫を指し、彼らは中国とマレー、さらに西欧の文化を衣食住等に広く取り入れました。このように重ねあわされた文化を総称してプラナカンと言います。その典型的な屋敷がチョン・ファツター・マンション（通称ブルーマンション）で、中国人貿易商の邸宅でもありました。アジアのゲートウェイのペナンらしいお屋敷で、我々はそこで次のAPPROの方向性について話し合い、今後のAPPROらしい平和構築のエキスポとスパイスを得ることができました。

○『虐殺祈念館同士のトライアングル構想』とAPPROらしい平和構築

韓国ノグンリ平和財団チョン博士提案の「虐殺祈念館同士のトライアングル構想」こそがこの会談から生まれたエキスポであり、スパイスでした。アジアは、ペナンも含め、戦争時には多くの人々が虐殺された地域であり、その事をどのように次世代に継承させるかをみんなで考えているうちに、韓国の「ノグンリ・済州島」とベトナムの「ソンミ村」と日本の「広島・長崎」をつないで、いつかはそこに中国の「南京」を加えて、「アジアから発信する平和構築を」。そのためには、まずこの「トライアングル構想」を実現させようという話が登場しました。これもプラナカンならではの文化からの発想かも知れませんね。

○「ベトナム・ソンミ村からアジアの平和運動（2018年3月15日）を」みんなで成功させましょう。

来年3月16日にベトナムのソンミ村にて虐殺された人々のことを忘れないための祈りの会が開かれます。韓国とベトナムと日本のトライアングル平和構築構想にご関心のおありの会員のみなさんは、ぜひご参集下さい。あなたの「アジアから発信しなければならない平和運動」のエキスポとスパイスをこのプロジェクトでかみしめることができるでしょう。平和学会員のご支援とご協力をお願いします。（桂 / 問い合わせ先 katsura.ryotaro@friends.jica.go.jp）



プラナカンスタイルの屋敷。撮影・山根和代氏。

■ APPRA 参加報告—多文化共生を感じる街ペナン 佐々木陽子（NGO オリーブとローズマリー）

APPRO2017では、朝鮮学校が不当な形で公的承認を奪われ社会的攻撃に晒される現状を報告した。内容は、以前のものに⁽¹⁾、いわゆる「朝鮮学校無償化裁判」（広島と東京地裁は敗訴。大阪地裁が勝訴。他の地裁は継続中）の経過を追加した。

金正男暗殺事件や核問題など北朝鮮への反感は強く、「母語や出身文化の継承を日本国内で朝鮮人が重視する意味」がアジア各国の平和学者に共有されるかどうか、事前には大いに憂慮したが、発表後の質疑はもとより、時間外に質問や肯定的感想を寄せる人もいて、高い関心を受けたと感じた。アジア全域に及ぼした日本の軍事加害に伴う文化的加害、とりわけ植民地化した土地の精神文化を破壊した点を「植民地責任」論として扱うためにも、また多文化共生の世界的潮流からも、さらにはマレーシアの教育多様性と比較しても、案ずるよりは理解されやすかった。

興味深かった発表としては、タイ人の大学院生によるロヒンギャへの教育支援の調査、インドネシアの実践者によるISに加入した若者の更正教育の実態報告、マレーシアの大学院生によるイスラム思想をもとにした自然共存の建築や都市計画の分析などが挙げられる。日本から参加した大学院生の高い英語力や分析力にも驚いた。マレーシアの多文化環境の実践を目の当たりに、アジアの共生と平和の重要性を再認識した。

一方で違和感を覚えた点もある。昨今、南西諸島で軍事基地建設⁽²⁾が急速に行われており、日本平和学会は基地反対声明も出している⁽³⁾。在日米軍は、基地周辺の住民被害はもとよりアジアに軍事加害を加える存在としてベトナムや朝鮮戦争、イラク戦争に関わってきた。しかしながら研究発表として「辺野古は軍トレーニングセンター」と

発言し、在日米軍との共生を強調する発表があったことは、在アジア米軍の解釈を意図的に読みかえるものではないかと思われた。会議最終日にはトランプと金正恩の戯画を写しながらの分析も行われていたが、それらの共有されている問題とは逆に、安倍晋三の外交問題や歴史修正主義はアジアで十分に共有されていないようであった。日本とアジアが真の意味で「戦後」を獲得するために、安倍晋三が表象する政治問題を共有し分析していくという課題を改めて認識した。

議論は日ごとに深まり、平和に関して誠実に実践するアジアの仲間が大きく励まされ勇気づけられた会議であった。機会があればまた是非参加したい。

- (1) 佐々木陽子 (2015) 「命の根っこを守る権利」『トトリ通信：朝鮮高校無償化ネット愛知』12, 9-10 http://mushouka.aichi.jp/wp-content/uploads/2015/01/totori_12.pdf
- (2) 小西誠 (2017) 「あなたは、この恐るべき事実を知っていますか？—115 枚の写真・図で見る自衛隊の先島—南西諸島配備の実態！」<http://www.maroon.dti.ne.jp/shakai/media-nansei.pdf>、小西誠 (2016) 『オキナワ島嶼戦争—自衛隊の海峡封鎖作戦』(社会批評社)。
- (3) 日本平和学会 (2015) 「沖縄辺野古米軍基地建設の即時中止を求める声明」<https://www.psj.org/> 論説・声明 / 沖縄辺野古声明 /



Street of Harmony にて。撮影・佐々木陽子氏。



Street of Harmony にて。多様な宗教や移民の人々がハーモニー(調和)の中に暮らしていました。共生するということがあまりにも自然に実現している街のなかになると、心の奥まで気持ちよくなりました。ただ、モスクの塔には、日本軍の銃撃痕が残っていました。撮影・佐々木陽子氏。